

第二十九章 龍神の聲

愛姫の悪阻

梯係を乗せた手輿は、―――それと知らぬうちに、愛姫が待ち侘びてゐる館へと還り到着してゐた。

「あつ、もう着いたのかしら
突然にも我にかえつたように、梯係は小さく呟いた。

愛する夫梯係をいそいそと出迎えた愛姫は――二人つきりになつた時、嬉しうに目を輝やかせてこう言つた。

「私、あなた様の御子を身籠つたようですよ。そのことを少しでも早くお伝えしたくつて、ご帰館を随分お待ちしております。」「そうか。私のややこが生れるのか。それ

は目出たい。梯係は、目を細めて、―――また脹らんではない。愛姫の御中をやさしく擦つた。

すいめん 1176°
随分たいやう 1911°-1/2
腹を元 1931°

愛姫の子 2010°
2084°
帰館、帰還 516°

1,979°-1/2

待ち侘び 2082°
突然 1980°35分
手輿 1971°

云 314°
小林 378°
小林 201°
大木 1826°
「腹」
御腹は

2003-1/2 1.979-2/2

愛姫は言った。

「この子はきつと、貴方様のお国で生れる

ことになるわ。そういえば、お屏の介添の出

来る者を一緒に連れでいった方がよさそう

ね

へ愛姫は、この身重の身体をおいて大海を

渡り、私について行こうといているのだらう

か

梯焦は、微笑みを浮かべながらも、心配そ

うにその御中をおいとおしみ、そつと撫でつづ

前の子

けた。

愛姫はさらに、こう言った。

「南の設馬国（投馬国、薩摩国）へ向かって

船出される梯焦様をお見送りしたあとで、私

宇智（太宰府あたり）へ帰り、父母にお別れ

してきたいと思ひます。

宇智から不彌国まではごく近うございます

ので、時を見はからつて、不彌国の檀日へ参

り、梯焦様の御越しをお待ちすることに致し

ますわ

560.1.16⑥
172E 36' 豊後 36' (大坂のあまはら) 1.980 - 1/3
172E 48' 和布 2163' P
172E 57' 689'

せつめのくさ
駿馬国 1905^P-1/2
突然 1979^P-1/2
健康 3696 砂勝

真剣な面持

写真真図版
345 344

保戸島
わかめ

なんとも、いじらしいほどに健気な愛姫で
ある。
と、そのとき愛姫は、とつさに両手で口を押
え、急いで部屋を飛び出していった。漱しい
悪阻だった。
青い顔をして戻ってきた愛姫の目頭には苦
しみの涙があった。
「私達の国の昔からの言い伝えでは、一
色の艶やかな長い和布を悪阻の時に食べると
きつと髪が濃く、丈夫な子が生れるといひます。
梯橋様、これから設馬国（薩摩国）へ行き
この島の東側をぐるりと廻っておいでになる
のでしたら、斯馬国の徳門（豊予海峡の保戸
島）の海で採れる長く美しい七尋の和布（ワ
カメ）を、ぜひ手に入れ、きて頂きとう存に
ます。」（山城国風土記逸文へ宇治橋姫。豊
後国風土記へ海部郡穂門の郷。糸参照）
愛姫は、ちで、夫、梯橋に手土産を懇願した。
だ、た、梯橋の丈夫な子を産みたいという
母としての強い願いからであつた。

1,980^P-2/3

・カラー

・頁の上半分に、大きく
載せて下さい。



↑
カット

はやしせと
速水瀬戸
↑
ルビ
高等
地図
13

1429

写真図版344 豊予海峡(速吸瀬戸)に浮かぶ「保戸島」

1329

「おおいたけん せいし さんぽ」

『大分県の歴史散歩』大分県高等学校教育研究会 山川出版社 2008年4月25日発行 191頁参照

1229

「ほとじま ゆうり」

保戸島の周囲は流れが速く、身の引き締まった鰺や鯖などの回遊魚がよく釣れる。

1980^P-3/3

カラー

- ・ 頁の下半分に
左右ハはみ出に
大きく載せて
下さい。



13QG

14QG 写真図版 345 わかめ (若布・和布など書く)

- 12QG 『植物の世界』(第12巻) 朝日新聞社 1997年10月1日発行 243頁参照
- ・ 日本各地の海岸に生ずる ^{わかめ} 〔波の穏やかなところでは〕長さ約1m ^{わかめ} 岩に付着 ^(広辞苑)
 - ・ 波(潮流)の激しいところでは、葉は狭くて深い切れ込みとなり、茎は長々と伸びる ^{156P}

1981

ひめ 領布 万2-91
#868

南へ

和島台国の大地が、立ち籠める春霞の海の
底に深く沈み、暁の未だ明けやらぬ柔らかな
な淡い光が、朧ろげにあたりを包み始めた頃

墨吉の岸边は、見送りの人々で

いっぱいだったや

それは、和やかな見送り風景であつた。

難升米(中臣)も笑顔で手を振り、暫らく

の別れを惜しんだ。

難升米は後日、陸路をとつて東の王都日伊

邪国にへ行き、――その後、梯僦を送つて

帯方郡へ赴くことになつていた

「快適な船旅を祈ります。それでは

伊邪国にてお待ち申し上げておりますぞ」

ひたひたと寄せては返す波打ち際には、身

を乗り出し、領布を振りつづけている愛姫の

姿があつた。

膝まで海に漬かり、水飛沫をあ

げ、両手を高くとあげて、大声で叫んだり

――きりに名残を惜んでくれているあの

いばき 店
飛珠 1010P

くろのせと
黒瀬戸 ④1479-1/2 1982-1/2
④1984 万1-149P

元 412P

さすみに春の三朝路
万②-385P

ヒリヒリ 取取 1628P
八土記 尚子条 有難う 元 412P
快調 小林P 470P
385P 万版
中野の事 三
志村の事 194P

幼い男の子たちの姿もあつた。
子供らよ、見送り有難う。
舸子達の漕ぐ華美の限りも尽くた船の内に
は、為人の姿容秀美しく、風流なるものと類も
ない梯候の姿があつた。色取り取りの旗や幟を
靡かせた船列は、霞のかなたへと遠ざかつてい
し、やかて、霞のかなたへと遠ざかつてい
った。万巻九十七四の。「風土記」浦島子条参照
船団は、穏やかな春の潮路を快調に進み、
数日の後には、不知火の内海から薩
摩の迫門（現在の黒瀬戸。万巻三一四ハ
参照）の外側の大海原へ出た。（写真版 346 参照）
すると、波の様相が一変した。荒々しい
はかりの怒濤が次から次へ襲いかかつてき
て、船は波の底から頂へと、まるで木の
葉のように頼り無く漂いつづけた。
左手には設馬国（薩摩半島南端部）へと連
なる丘陵があり、右手には果てしない荒
海が広がっていた。
梯候は、身体をまるめて踵り、風と飛珠と

もいた。

1,982^P-3/2



130G 140G 写真図版 346 『黒い瀬戸』の南端部 [ながい(ま)む(が)わ さつま(ま)す 長島(向こう側)と薩摩を結ぶ黒い瀬戸大橋]

『万葉歌碑見て歩き』梅林孝雄 海鳥社 2004年9月28日発行 126頁参照

120G 左側は、東シナ海である。

白い高津地図 1頁

船子 云 1955

櫻が散った後に
ユリハモメ 加居た。
Q 現 **改行**
おぬぐ
茜雲
招風扇も受けて
着毛に映る
雲のこと。

1983
由1995-1/2
由1995-1/2
英祚 地8緯27
八上記P
胡

50000 地図 地名 27
1809 **天改行**
小林 337
今月の宿所
この更中史
「阿久根」
50000 地図 地名 27
1809 **天改行**

を避^サけながら、行く手を見詰めていた。
その日の太陽は、すでに西へ傾いており、
茜色^{あかぬいろう}を^とした^{おおぞら}大空を、海島の群^{うみどり}が大きく弧を描^{えが}いて、飛^とび去^さっていった。
波間^{なみま}のはるか前方^{ぜんぽう}に見え隠^{みかく}れ^{かく}れていた緑色^{みどりいろ}の小さな島々が、一^{いち}次第^{だいいだい}次第^{だいいだい}に近づ^{ちかづ}いてくる。そんな時、伊支馬^{いしま}が、船^{ふね}をあやつる船子^{ふなこ}達^{たち}に命^{めい}じ^じた^た。
「阿胡根の子島^{あこねのこしま}に船^{ふね}を着^つけい^いろ。」
こうして梯^{てい}儼^{えん}等の一行^{いっこう}は、今日の宿所^{ゆくしょ}の英^あ祚^く（今の阿久根^{あこね}）の子島^{こしま}に、艦^{かん}網^{もう}を結^ゆえた^あ。
「また、阿久根^{あこね}の海^{かい}上^{じやう}には、雄島^{ゆうしま}・雌島^{めいしま}等^らと呼ば^よれる数^{かず}個^この小^こ嶼^{しま}があ^あって、風景^{ふうけい}甚^{はなは}だ佳^いなり」とい^いう。
（「帝国地名辞典」太田爲三郎、名著^{しやうてき}出版^{しゅつぱん}、ヘアクネ参照^{さうじやう}）
も^もつとも現^{げん}在^{ざい}、阿久根^{あこね}の沖^{おき}の島々^{しま}は、大島^{おほしま}（五^ご万^{まん}分の^{ぶん}の^の島^{しま}）・桑島^{そうしま}・元^{もと}え島^{しま}などと呼ば^よれ^れる。今^{こん}夜^やの停泊^{ていぱく}地^ちとさ^さめた^た又^{また}の^のた^たであ^あううと^として話^わを進^{しん}め^めてゆ^ゆきたい。

大荒波 装豆刀皮

荒^{あら}立つ波^{なみ} 阿^あ胡^く根^ね の小島^{こいま} (* 「胡桃^{くるみ}」と書いて、「くるみ」とよむ)
夜^{よる}すつきり

かつさ かつさ え
 陸 陸 角 428^p ⑤ 1906^p 15
 一 二
 魚 魚 え 1326^p か

上^あつてきたせつかくの魚を取り落^{おと}したりで、釣^つり針を魚に持^もっていかれたり、船縁までが出来なかつた。^(竿、丹後国風記逸文浦嶋子参照)
でも、梯儼は一匹の魚さえ釣^つりあげること
うした^{というの}だろうか、どんなに竿を上^あげてみても、梯儼は一匹の魚さえ釣^つりあげること
が出来なかつた。^(竿、丹後国風記逸文浦嶋子参照)
でも、梯儼は一匹の魚さえ釣^つりあげること
が出来なかつた。^(竿、丹後国風記逸文浦嶋子参照)

九士と 四かみよ 八士に
独り 471^p 三日三夜 471^p

1.986^p 1/2

560.1.21^田 47.4.2^田
悲しい 哀しい
その 次頁 471^p

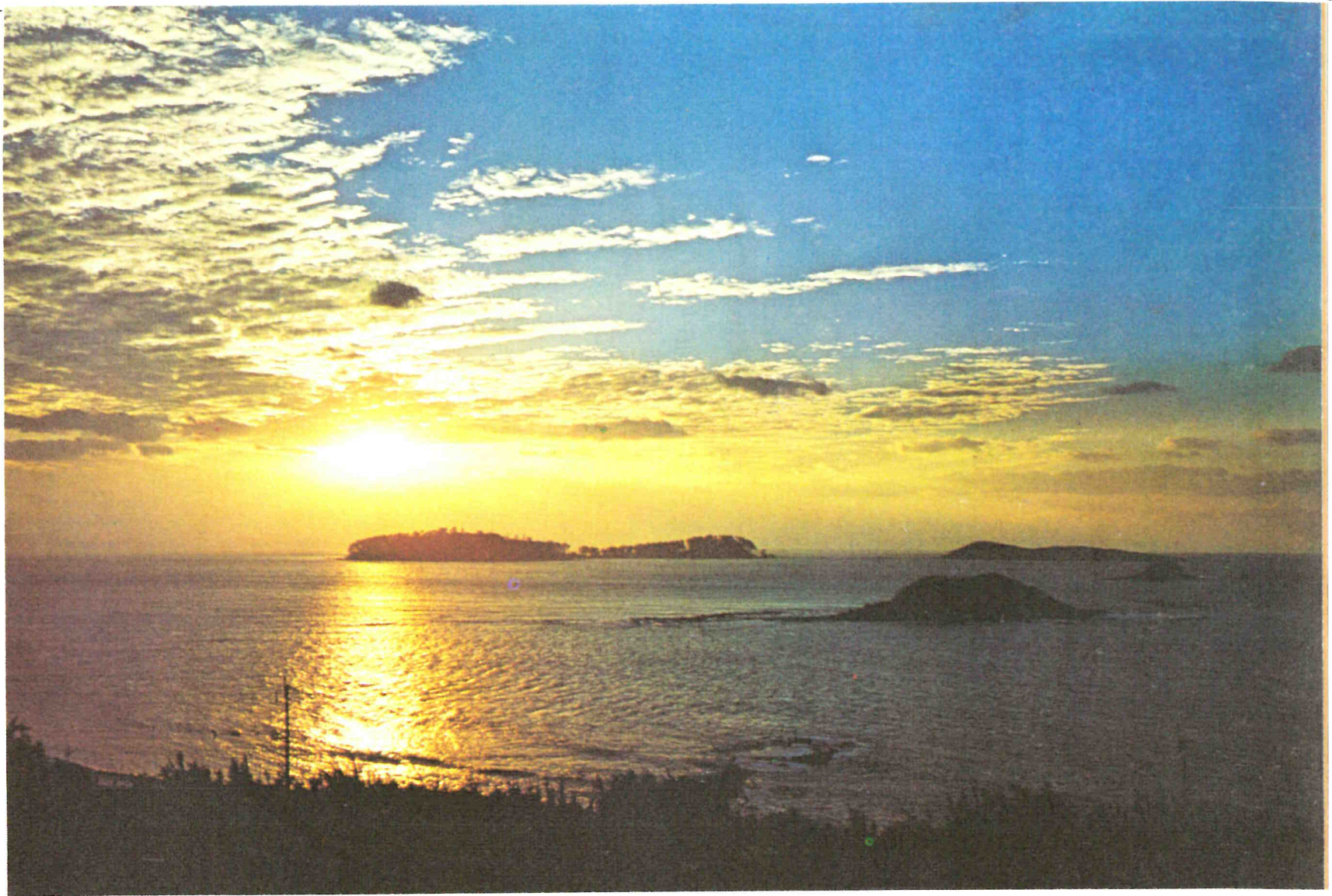
悔しいばかりであった。
そんな日が、三日三夜も続いて、魚釣り
少々飽きてきた。梯傷は、
ころ、独り、船を漕ぎ出した。写真版 347 参照
海上に点々と浮かぶ小さな鳥々は、可憐で美
しく、水面に緑濃りかけを落していった。
ここに梯傷は、携えてきた袋から笛を取り
出し、「そつと吹きはじめた。快い軽妙な笛
の音が、かすかな震えを帯びながら夕日に
キラキラと輝く波の上を渡っていた。
煌めく海原の上を流れてゆく。山城国風土記 遠く南の橋姫(笛)
梯傷は無心に笛を吹き続けた。その牙えた
音色は、柔らかに優しく響き、一りりとして
かて、次第に狂おしいばかりの旋律へと変
っていった。
と、いーいーそんな時、梯傷の背後に、そつ
と近づいて来る櫓の音が聞こえた。
へ釣り人の乗った小船であろう。一りり
梯傷はそう思い、少しも気にかけず、
なく、さらさら、ひたすら、笛を吹き続
けた。美しくも憂いを含んだやるせない音調
が、うら哀しく、切々と響き渡っていた。

OK 凡士に 471^p

1.986^P 2/2

- ・カラー
- ・左頁の上半分に大きく掲載。

- (右側が)
- ・もう少し明るく
ないませんか。
- (暗くならないように
お願いします。)



④ 2004^P 19th 赤女

136^G

146^G 写真図版 347 落日の大島・小島

126^G 『阿久根市誌』 阿久根市 昭和49年12月15日発行、口絵参照。

・左側は大島、右側は手前から元え島・小島・桑島の順に並んでいる。 164^P

1987^P

あやう しょうかく え 1988-1/3
 危い え 65P 警告 566P 驚いた (赤) (主)

コクヨ ケー20 20×20

すっかり興を削いで^{キよう}になつてまいりました
こと、どうかお許し^{ゆる}下さいませ
「いえいえ。どうか、そういうふうにはお
考^{かん}えにならないで下さい。この上^うもなく風光^{ふうかう}
明^{めい}媚^びなこの阿胡根^{あこん}の浦^{うら}に、女人^{にょなん}の玉^{たま}の雫^{しずく}は似
つかわしゅう存じます
「まあ、何と^{なん}お優^{やさ}しいお言葉。そのよ
うに仰^{おつ}しやつて下さいますと、――幾分^{いくぶん}、
心が慰^{なぐさ}められるようでございます」
女人^{にょなん}はこういうと、簾^{すだれ}を割^わつて、そつと梯^{てい}
僂^{れい}を見つめ、――そつて、丁寧に会釈^{えいせき}した。
「――梯僂^{ていれい}は、領布^{りやうふ}を頭^{あたま}にぐるりと御高祖頭巾^{ごこうそづきえ}の
ように巻^まいて、美しい目^め許^{もと}や眉^{まゆ}のあたりだけ
を露^{あら}ゆにしたその女人^{にょなん}の様子^{ようす}を見た時、大^{おほ}いに
驚^{おどろ}いたが、――ほとんど同時に、何故^{なぜ}か
いら、鼓動^{こどう}が高^{たか}なるのを覺^{おぼ}えた。
へこの御婦人^{ごふじん}は、一体^{いったい}、どなたであらうか。
きつと以前^{いぜん}、お会^あひしたことがあつたように
思うのだけれども、はつきりとは思^{おも}ひ出^だせな
い。あの目^めもと、あの御姿^{おすがた}。――あのお

④ 1526-5

おこて頭 294
大明頭中 1349 電

1.988-2/3

声。はてさて、ー、ー、ー五色を、た靈異極まり
ない亀のようなこのお方は、どなたなのか
梯儔は、とまどいなから、思いめぐらせる
のだった。

■ 参考までに述べる、
頭のようにも見える。御高祖頭巾は、目の
部分だけ出して頭部・面部を包む頭巾の一種
であって、主に婦人が防寒用として着用する
ものである。
日 御高祖頭巾の名称の由来につ

りては、多くの説があつて、定かでない。
ふつうには、形状が日連の像の頭巾に似る
からとするが、おくす頭巾（参盗頭巾）に似
てゐるところからなまつたとする説、大明の
高祖に關係づける説などがある。（「広辞苑」
へ御高祖頭巾参照）大明頭巾（等参照）
とところで、先に伊都国の日高祖山に關連
して、
神功皇后（天照大神）高祖（比咩）
という図式を考へてみた。（第二十一章へ柄

④ 1526-
-1/2 295

五色の亀
凡に記471P

きん 524
きん 1660
きん 546
きん 731

きん 735
きん 1660
きん 1633
きん 1660

1.989P

な 471P
な 31P
な 471P

それにしても、淑やかで優雅な貴公子といた
お姿や、このうえなく清らかなで高貴な気品
あるお声には、――――洛陽の貴公子。
梯儂の心を、ぐいぐいと引きつけずに、おか
ないものがあつた。
そして、五色の亀のようなその貴婦人の傳
いえない優雅な目もと、あたりには、
懐かしいような心を蕩かしてうつとりさせ
得ないえない、麗しい気配が漂っていた。
「~~さうな、一種形容し難い魔力のようなもの~~
~~が、たまたまつてゐるやうに思われた。~~
梯儂は、身の置き所もなく、頬をほんのり
赤らめながら、――自らを励まして、こう
言つた。
「今日の夕陽は殊更に赤く鮮やかに輝や
美しい緑の鳥々を浮べる、海はこんなにも
風で静まり返つてゐるものですから、――
暫し釣り竿を置いて、久しぶりに吹笛な
打ち興じてみるのも面白かうと、一人、
小舟を漕ぐ。」

わが胸の内

コクヨ ケー-20 20×20

元1967 疑う→不審 聖(天皇) 元1865

えおももち かおつ ま情

取3サの取りあえず 赤母 2004 OK

やつてきた 八上己471

× つてきた

月士 471

1.992 P

HL

月士 471

注 1991 459

怪 1985 959

証の人が忽ち来られたのだらうかと怪しく思
ったのでした。すゝと、~~女~~娘(乙姫)は微笑みながら對えた。
「風流え士が独り蒼海に汎んでおいでだと
うことを耳にしましたとき、私、貴方様と
近しくお話を致したという思いに勝てず、
風雲につき従い、大急ぎでここへやってきた
のです」
なにやらボツツとして、まだ覺め遣らぬお
ももちながら「梯儼は「風流え士らしく風流に
梯儼は復たこう言った。
「貴女様のような麗しいお方をお連れして
くる風や雲は、何の處より来るのでしょ
うね」
「娘は、その問ひかけに對して、
「あら、風は口雲も、天上の聖(天
皇の尊称)の家の人の名前です」
と、樂しそうに笑いながら答えた。
そしてそのあとで、~~女~~娘は「真顔になり
「梯儼様。……貴方様を追って私がここへ
参りましたこと、どうか御不審にお思ひにな
りません」
「相談らひて、愛しみましたきとう

入士記 471[?] 
 入士 471[?] 
 入士 471[?] 

と、いかにも不安げに、そつと囁くように言
つた。
「かしそうは言われども、目の前の婦人が
神女であることも知ったからには、滅多なこと
を軽々しく口にするわけにもいくまいと思えて、
儂は慎み懼れた。その心の奥底から疑いと恐れ
とか湧き上がってきさえるのだった。
そして、暫し沈黙の時間が流れていった。
先程までとは打って変わってすっかり口ご
もり、躊躇してゐる梯儂の様子を見てとると、
「内を明かした。すでに」
「賤妾の意は、もう定まっております。お
そらく、いつけに聞こえる」とでしうが、
私は貴男様と堅く永く契ううと思つてゐるの
です。但、君は奈何お思いか、早く許不諾
否」の意を知りたいと存じます」
梯儂は、あまりのことに、いよいよ戸惑い下
あきれるばかりであつたが、一か一驚きつ
も、一心に自らの答えを探し求めた。
「腹がすめ、たとき、

従って短く
凡士記 471 秘行

S60.1.27
H10.7.27
1994

とある
凡士記 471 注
1587

みやびき
凡士記 471 8行

梯儂はもう平生の風流之士に居っていた。
梯儂は、にっこりと微笑んで言った。
貴女様の御言葉の上に、更に重ねて言う
ところのものはございませぬ。私が貴女を愛
し思う心に、何でゆゑみまがございまいよう
で、娘が喜んだことは、いうまでもない。
「まあ嬉しいいわ。それでは梯儂様、棹を
廻らして常世の口和馬台国へ赴いて下さるの
ですわ。」
「……ええ、そう致しませう。」
梯儂は、設馬台国（薩摩国）で待っているで
あう赤女が、氣に掛り、心の仲に躊躇いもあつた。
「しかし、成り行き上、女娘に従って往
かなければなるまい、と思うのだった。
それにしても、
どうしたわけか、喜ばしいことはよく重なる
ものである。
あるいは、是の日、二代目の神功皇后は
底深き阿胡根（阿久根）の浦の真珠を手に入
れられたと、であつたらうか。」

かき知れぬい返り

1983.9.5
10-17

こと
1995P-1/2

10-16

宇二
阿久根

加々
街坊

ともあれ
へこのような詩情豊かな逸話が「大宮人たちの間で」長らく語り伝えられていたのだあううと想像させる。
なお、後代、
へへ二代目の神功皇后に相当する「香明天皇は、奇しくも阿胡根の小島（阿久根の小島か。但し、阿久根の小島に比して考えうる和歌山県御坊市の野島付近かも知れない）を目にされた。しかし、真珠を手に入れたことはお出来にならなかった。
ようである。
●万葉集には、「天皇（香明天皇）の御製歌云々」と述べ、次の歌を載せている。（万巻一）の左注参照）
わが領りし子島は見しき
底深き阿胡根の浦の珠を拾はぬ
大意「私が領していた子島は見えど、底深き阿胡根（阿久根）の浦の真珠を

H30(2018)5.17(木)~5.20(日)
令和2(2020)10.12(月) H4.1.10.14(4回)
H10.7.28

1.995^P-2/2

（いん）
真相 1155

（こつたへ）
好男子 元々9' 男の子のよい男

（こ）

10/14 F 10/13
10/13

＊ とも思える。
＊ とうは、いえ、その真相は分らない。
＊ 珠とは、よく似た音である。
うか
とを、比喩的に、珠と称しているのである。
人々、かいたら、梯のような好男子の
もった、穿った見方をすれば、
残念です。
（それは出来なかった。）
（それが心残り）

（こ）